

憧れていた後輩と、ついに二人きりになった夜 理性が崩れた瞬間（体験版）

第一章 新人研修

四月の朝。新年度の空気がまだ残るオフィスは、どこか慌ただしかった。新入社員が配属される日。営業部のデスクの周りでも、自然とその話題が増えていた。「今年は二人入るらしいですよ」隣の席の同僚が、コーヒーを片手にそう言った。佐伯恒一は短く返事をする。新人が入ること自体は珍しくない。だが今年は営業部の人手が足りず、教育担当が決められるらしいという話が出ていた。

「桜井里奈です。本日から営業部に配属になりました。よろしくをお願いします」緊張した表情の新人が頭を下げる。部長が言う。「教育担当は佐伯」それが、二人の最初の会話だった。

第二章 距離の近い後輩

新人研修が始まってから一週間。桜井里奈は想像以上に仕事の覚えが早かった。「ここまで入力したら、このボタンですよ？」「そう。それで送信すれば大丈夫」嬉しそうに笑う里奈。その表情はどこか子どもっぽく、佐伯の肩の力を少し抜かせた。

昼休み、里奈が声をかける。「先輩、お昼どうします？」まだこの辺の店が分からないという彼女に、佐伯は駅前の定食屋を教える。「先輩って優しいですよ」その言葉に、佐伯は少しだけ視線を逸らした。だがその頃から、里奈は少しずつ 佐伯の中で、ただの後輩ではなくなり始めていた。

第三章 飲み会の帰り

金曜日の夜。営業部の打ち上げ飲み会。里奈は少しだけ酔っていた。頬がほんのり赤い。「大丈夫か？」「ちょっとだけ酔いました。でも楽しいです」やがて宴会は終わり、帰宅する流れになる。

駅に着いたとき、電車はちょうど発車したところだった。静かなホーム。遠ざかる電車の音。里奈は苦笑する。「……行っちゃいました」次の電車はない。終電を逃した夜が、二人の前に広がっていた。

第四章 二人きりの夜（体験版ここまで）

深夜のファミレス。会社の外で、先輩と後輩が向かい合って座る。「なんか変な感じですね」「何が？」「会社の人とこんな時間に二人でいるの」

夜の空気。静かな街。里奈はぼつりと呟く。「先輩といると、安心します」

距離が近い。あまりにも近い。このまま一步踏み出せば　きっと、越えてしまう。

体験版終了

この夜。二人の関係は、もう戻れないところまで進んでしまう。

続きは本編でお楽しみください。

第五章 崩れる理性